

第15回全国学校飼育動物研究会大会 開催報告

全国学校飼育動物教育研究会 会長 宮下英雄

日 時	平成25年8月25日(日) 13:00~17:00
会 場	東京大学 弥生講堂一条ホール
テーマ	これからの学校教育と動物飼育
基調講演	「これからの学校教育と動物飼育～飼育活動が育てる子どもの心～」 文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 田村 学 先生
参加者	212名(教育委員会・園・小・中・高・大学教員・学生など106名、 獣医師・獣医学生など66名、保護者・愛護家など市民40名)
開会行事	主催者挨拶 全国学校飼育動物教育研究会会長 宮下英雄 来賓挨拶 文部科学省初等中等教育局教育課程課課長補佐 美濃 亮 様 公益社団法人日本獣医師会会長 蔵内勇夫 様 東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課指導主事 松尾 了 様

大会ではまず、宮下英雄会長から、10年という節目を迎えた本研究会が新しい体制で臨むとの挨拶があり、次期会長として鳩貝太郎(現副会長)が紹介された後、来賓の御挨拶を頂いた。

◆基調講演 「これからの学校教育と動物飼育～飼育活動が育てる子どもの心～」

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 田村 学

これからの社会の変化は激動といわれるほどの様相を示す。そうした中でたくましく生きていくためには、考える力やコミュニケーション能力などを育成し、課題解決力を重視した教育を行うことが重要である。従来、我が国の学校教育は、教師が正解保有者として存在し、子どもたちに知識などを伝える・教えるという形態をとってきた。これは、子どもたちにとっては受け身の学習を余儀なくする。

探求的・共同的に学ぶスタイルが重視される。生活科は、体験活動を通じた探究の営みを基盤とし、友だちと協調して気付きの質を高めていく教科である。動物飼育は、その活動の重要な一つを担うものである。

◆口頭発表(要旨) 座長 東京学芸大学附属小金井小学校副校長 関田義博

1. 「赤松小学校での生活科におけるモルモット飼育の実践」

東京都大田区立赤松小学校 鹿島正史 恩地澄子 増田美和

身近にいる生き物を飼育することで、育つ環境、変化や成長の様子に関心をもち、生命への思いやりの心を育てることを目標とする。飼育しているモルモットは4匹で、月・水・金曜日にクラスごとに世話する時間を設けている。飼育ケースの清掃後は「触れ合いタイム」として世話をした児童とモルモットが遊ぶことができる。

11月には、1年生に引き継ぐために、1・2年生のペアをつくり掃除をはじめとする世話の仕方を体験する。飼育活動により生活科としての学びの質が高まっている。また、生命をいとおしく思う情操も育っているなどの成果が見られる。高学年での他の動物飼育に対する積極性を高めることが課題である。

2. 「小動物とのふれあいで育む豊かな心～ふれあいストリートの活動を通して～」

東京都小平市立小平第六小学校 市尾公子 小田佐和子 吉村尚子

飼育効果を得る基礎である「動物への愛着」を児童に培うために、モルモット2匹、うさぎ3羽を職員室の廊下で各ケージに入れて飼育し、「ふれあいストリート」と名付けた。飼育の世話は飼育委員会が担当するが、他の子たちもそれぞれやってきて親しんでいる。

2・3学期の中休みには、飼育委員会が中心となって他の児童と動物が交流し合う「ふれあいたい」の活動を行っている。飼育は飼育小屋、との概念から身近なケージ飼いに転換したことにより、全校児童の動物に関わる興味と関心が高められて、動物の気持ちを考える子や上手に文章が書ける子が増えた。なによりほんわかした雰囲気が学校に漂っている。

3. 「不登校児がモルモット飼育の機会を得て」

奈良県香芝市下田小学校 LD・ADHD 等通教指導教室 芳倉優富子 帝塚山大学講師 三本隆行

A児は母子分離不安をもち、小学校3年生になって登校しぶりが出始め、保健室登校となった。3年生2学期、学校に来る意味や必然性を与えるためにモルモット飼育を検討した。通級指導教室で飼育する教師の手伝い、毎日の世話の必要、土日や長期休業日に家での世話を依頼する。本児はやりたいとの意思を示した。

11月、モルモット「ルリー」の飼育が始まる。本児の登校が驚くほどスムーズになる。ルリーをケースから出して遊んだり、下校時には仲のよい友達と一緒に帰ったりする姿も見られるようになった。

3月、本児は「来年は4年生だから、学校の教室に行く」と言う。また、児童会の地域活動でのサブリーダーに立候補するに至るまで成長した。

4. 「チョコマシュと友だちとぼくわたし」物語

～教室飼育活動を軸とした学びの広がりや深まり～

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校 加藤直子

横浜にある野毛山動物園で、飼育員の方よりモルモットの飼育に対する心構えやなどを伝えていただいた。

「モルモットさんから自分へ」「自分からモルモットさんへ」との双方向の手紙を書く活動を実施した。単なる観察カードへの記入とは異なり、心情の伴う表現となりモルモットへの思いを大きくできた。「おうちの人から子どもたちへ」の手紙も書いていただいた。子どもたちが幼いころ愛情をもって育てられた気持ちを知ることが、モルモットに対する態度の変化に結びついた。

飼育活動を軸として次の学びが広がった。①リアルな課題を正面から話し合う。②餌として与える野菜の栽培を行う。③土日や長期休業日中は、モルモットは家庭で保護者とともに過ごし、保護者も変化していった。④朝夕の会で、モルモットについて気付いたことを話し合う。⑤国語科で扱った群読劇と関連させ、飼育のエピソードを劇化して表現した。劇団名は「チョコとがんばりマッシュ」となった。

◆パネル発表

1. 「飼育を究めよう～教育課程に位置付けて～」

東京都西東京市立保谷第二小学校 丸山浩昭

4年生による学年飼育を継続して10年になり総合の学習として確立している。土・日や長期休業日中は親子当番をしている。年度末には、3年生に向けて「飼育引き継ぎ集会」(ビデオで展示)を行うとともに、3月は3年生と一緒に飼育当番を行い、命のバトンを引き継ぐ工夫を図っている。

2. 「オオカマキリの飼育がもたらす児童の生命観の変化～学級経営上の方略として」

福岡県福岡市立野多目小学校 山下浩之

肉食動物に対して、草食動物を捕食するとの誤解が存在する。肉食動物であるオオカマキリの飼育を通して、児童の肉食性に関する生命観がどのように変化していくかを考察した。

3. 「カイコの飼育と生徒の変容～世話はよりていねいに、観察はより深く～」

宮城教育大学附属中学校 高橋知美 宮城教育大学教授 田幡憲一

2年生（160名）3年生（159名）を対象に全員でカイコの飼育を行った。一斑4人で10匹のカイコを卵から成虫まで飼育する過程を通して、虫嫌いの生徒が変容していく姿が見られている。

4. 「うさぎとのふれあい体験指導実習」

公益社団法人群馬獣医師会 学校動物愛護指導委員会委員長 桑原保光

平成10年から全国に先駆けて獣医師を校医として県内の小学校に派遣する「動物ふれあい教室」を行っている。動物飼育管理指導や治療などの支援を自治体とともに展開している。自然環境と動物との共存共栄のためのリーダーを育てることを目的としている。

5. 「土日の対応、実例。全国の獣医師会の支援状況一覧」

全国学校飼育動物研究会事務局長・全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰中川美穂子
土日の世話に保護者が参加する実践を朝日小学生新聞の記事で紹介した。また、4年生が学年全員で飼育する「学年飼育」を保護者は喜んでいること、と「飼育しない4年生」の保護者は、児童の生命観に家庭で犬猫を飼ったことが影響したと答えた調査結果を配布した。

◆講評 全国学校飼育動物研究会運営委員・聖徳大学大学院教授 吉本恒幸

生き物とのかかわりには、次の3つの様相がある。一つ目は、生き物に親しむことである。相手を思いやる心をはじめとして優しさという感性の原点が培われる。二つ目は、生き物を知ることである。小さな気付きから、発達段階に応じた「知」の学びを得ていく。三つ目は、生き物のために行動することである。友達と協力しながら身近な生き物が快適にいられる環境づくりを行うことであり、やがて自然環境や地球規模での環境保全の行動に発展する可能性を有するものである。子どもたちは、それら三つの様相をスパイラルに体験しながら、それぞれの質を深めていく。

生き物との直接的な触れ合いの機会をなくして稲子どもたちの生命観は深刻な課題を示している。「死んだ命が生き返る」と答える子どもたちが20%を超えるとの調査結果は深刻である。生命には、有限性・継続性・共存性・神秘性があることを飼育を通して感得させていく必要がある。

発達障害の子どもたちの存在は、学級経営で重要な問題となっている。飼育とのかかわりで子どもたちの支援を図ろうとする実践報告は、今後の動物飼育の可能性を広げるものである。

◆閉会の言葉 全国学校飼育動物研究会副会長・首都大学東京客員教授 鳩貝太郎

本研究会が発足してから10年目になる。宮下英雄会長のもと、中川美穂子事務局長の献身的な努力により、全国の関係者の理解と支援をいただき発展してきたことに心から感謝する。

教育の在り方が変化する中で、また新たな実践研究を積み重ね、子どもたちの健全な成長に寄与する使命があるものと自覚している。次年度から会長という立場に立たせていただく。皆様のご支援を切にお願いしたい。